

# 私にも 言わせて! 第114回

## 人とのつながりが行政医師の要 故郷に帰り、医師に転身した保健所長

行政医師として2年、保健所長として1年半が過ぎました。故郷に帰りたいとの思いから、保健所に転向しました。イメージとは全然違う世界に戸惑う毎日でしたが、頼りになる事務職や専門職の方々に支えていただいて何とかやっています。「人こそが財産」と思う方はぜひ、行政医師の世界へどうぞ。

### 30歳で医学部受験

大学は工学部に進み、卒業後は技術職で化学メーカーに入社しました。首都圏の研究勤務で化学実験が仕事でした。好きなことをやってお金がもらえらるとは幸せなものだと思っていました。ただ、実家の両親も年老いていく中、このまま首都圏に住み続けてよいのだろうかとも感じていました。

30歳の時、父が冠動脈バイパス術を受けました。父の手術日には実家のある八戸市に戻りましたが、首都圏と八戸との距離を初めて負担に感じ、急に故郷に帰りたくな

りました。帰るのは良いが仕事はどうしようかと考えました。子どもの頃は医師に憧れていたもので、改めて医師を目指そうと決めました。地元の弘前大学医学部医学科を受験しました。面接官に「年齢のハンディキャップで、臨床医師としての活動期間も短いのではないか」といったコメントをいただきましたが、「この年齢で受験勉強をやってみて、人間は30歳になっても伸びると思っています」と、たんかを切った記憶があります。しかし、途中から行政医師へ転向し、臨床経験年数がさらに短くなるとは、まったく予想していませんでした。

の経験は確かに現在に役に立っています。そして、感染管理認定看護師（ICN）の存在がいかに貴重か、いまさらながら分かりました。今では、クラスターが発生した高齢者施設への立ち入りや感染対策の助言でお世話になりつつ放しです。

### 行政医師への転換

「留置針の針先がよく見えないうい」。40歳代のある日、調整障害、いわゆる老眼に突然気付かされた。不安と限界を感じさせる出来事でした。50歳を過ぎて、病院の全科当直は減りましたが、小児科常勤医師が私だけになると、オンコールもきつく思うようになりました。そんな時に八戸市保健所に誘われました。気が付くと50歳代後半になっており、もうすぐ暦も還りそうです。八戸市に戻る最初で最後の機会と思いい、お受けいたしました。公衆衛生の経験はないのですが、勤務医時代の感染対策委員の経験が保健医療面で八戸市の役に立てばいいと思いましたが、実際は勤務病院への小児科医派遣の都合で、令和2年4月に保健所に

医学科のクラスでは私が一番年上でしたが、他学部を卒業して20歳代半ばで入学した方も10名以上いました。翌年の入学者の中には、教員をされていた40歳代の方がいました。ただでさえ在学期間が長いのに、入学者の年齢も高いとは、在籍した工学部とは別世界でした。

### 小児科医時代

医学部卒業後は弘前大学医学部の小児科学講座に入局しました。小児科希望は臨床実習時に決めました。臨床実習は1科2週間で、小児科の前は泌尿器科でした。前の2週間と比べて、子どもの触り心地はお肌がすべすべで、なんて良いのでしょうか！もちろん、診察には触覚も大切ですので（誤解を招かぬように）。そんな感動的な志望動機で小児科を選びました。

大学病院には初期研修期間以外では1年間しかおらず、ほとんど

赴任しました。

### 保健所勤務

保健所には副所長として赴任したのですが、8月に所長の澤先生が退職され、後任の所長を拝命いたしました。まだまだご指導を仰ぎたかっただけに非常に残念であり、かつ心細いスタートでした。

保健所には獣医師、薬剤師、保健師、臨床検査技師、化学職といった各専門職員がいます。また、ベテランの事務職員がいます。同じ課にこれだけ各分野でのプロフェッショナルが集まっているのが保健所の特色です。分からないときや困ったときに、誰に聞けばよいかを覚えることが重要な仕事であり、各事業に適切な専門職を当てるのがマネジメントとも思えます。まさに「人こそが財産」という世界です。

### 健康増進計画

今は新型コロナウイルス感染症対応の毎日ですが、一次予防である健康増進計画こそ保健医療行政の根幹かと考えています。青森県では壮年男性で脳血管疾

子どもの笑顔を見るのが一般小児科医の醍醐味なのですが、そもそも子どもの感染症罹患を防げれば家族にとってより幸せなのではないかと思いはじめました。臨床から公衆衛生へ目を向ける第一歩だったような気がします。平成22年からロタウイルスの経口ワクチンが発売され、当初は任意接種であったものの接種率が徐々に高まりました。30年ごろは、ロタウイルス腸炎の入院例が激減した印象があります。また、小児肺炎球菌ワクチンとヒブワクチンの有効性も感じていました。21年ごろまで年に数例あった細菌性髄膜炎が、勤務先の病院の小児科では22年以降まったく見なくなりました。一次予防の費用対効果が優れている例と、今ならいえるでしょう。

また、院内で感染対策委員に任命されました。多くの医療機関では呼吸器内科医や小児科医に呼び掛けられるようです。感染対策加算1を取っている他の医療機関との院内感染対策相互評価や、加算2を取っている病院とのカンファレンスがノルマで、結構拘束されました。ただ、院内感染対策委員



八戸市保健所長  
工藤 雅庸

平成14年弘前大学医学部医学科卒業。小児科医としての勤務を経て、令和2年4月に八戸市に入庁。同市健康部保健所に配属、同年8月より現職。

が医局から派遣された市中病院小児科勤務でした。ウイルス下気道炎やウイルス性胃腸炎といった急性感染性疾患例が多くを占めます。秋のRSウイルス感染症、冬のロタウイルス腸炎は定番でした。乳幼児の入院にはたいいとお母さんが付き添います。下気道炎でも胃腸炎でも入院直後の子どもはつらそうですが、短期間で症状が軽快し、見る見るうちに元気になります。ただ、付き添いのお母さんは日に日に疲れがたまっていくようでした。小児科病棟にはサークルベッドがあり、柵を上げればベッドからの転落を防げるようになっていきます。でも、1〜2歳児はお母さんべったりなので、お母さんもサークルベッドに入ります。大人には狭く、まるで檻の中にいるようです。子どもが病気になるとう家族全員に負荷がかかります。医療介入をして元気に回復した

患や心血管疾患といった循環器病罹患率が高いことが報告されています。循環器病のリスク因子の一つに肥満があります。そして青森県は小学校高学年と中学生の肥満率が全国で最も高いというデータが得られています。小児期から肥満をコントロールできれば、青年期、そして壮年期の循環器病発症率を抑えられ、平均寿命、そして健康寿命の延伸につながることを期待できます。「メタボリックシンドロームの予防は小児期から」です。あるベテランの小児科医が提案してくださいました。「3歳半健診で肥満傾向を見つけて、食餌指導を始めよう。思春期の肥満度改善にどれほど寄与できるか評価したい」。素晴らしいアイデアです。小児科医時代の経験を生かして今の子どもたちの健康増進を進め、成人になってからの公衆衛生学的成果を目指したいものです。

### おわりに

若手の公衆衛生医師を募集しています。うまいイカをご馳走しますので、ぜひ八戸市保健所へいらしてください。